

二二 来賓

狩衣黄なる別当は、
眉をけはしく茶をのみつ。

袴羽織のお百姓、
ふたり斉しく茶をのみつ。

窓をみつめて校長も、
たゞひたすらに茶をのみつ。

しやうぶを塗れるガラス戸を、
学童まなこらこもこもにのぞきたり。

語注

狩衣 もとは狩などの時に用いたことからこう呼ばれるが、平安時代に公家が常用。盤襟まらえりで脇を縫い合せず、裾を袴の外へ出して着用する。烏帽子、狩衣、衣、単、指貫さしぬき、下袴、扇、帖紙しやうし、浅沓あさくつを狩衣装束と呼んだ。鎌倉時代以降、武士階級が用いることにより普及し、神職もこれを身につけた。

別当 寺院の寺務を統括した人のこと。ここでは神社の別当となつてい

る。
しやうぶ 麩糊のこと。ガラスに塗つてくもりガラスのように見せた。ところどころ剥けているので「学童ら」が中を覗き見したのである。

大意

黄色い狩衣を着た日高神社の別当は、眉をひそめてお茶を飲んでいる。羽織袴で正装した農夫も、二人ともそろつてお茶を飲んでいる。

校長は窓を見ながら、ひっきりなしにお茶を飲んでいる。
ガラス戸の麩糊がはげたところから、子供たちは職員室をかわるがわる覗き込んでいる。

評釈

口語詩「職員室に、こつちが一足はいるやいなや」を文語詩に改作したもので、現存稿は四。下書稿(一)は黄野(2222行)詩稿用紙に書かれた口語詩「職員室に、こつちが一足はいるやいなや」の下書稿(二)に書かれたもの。下書稿(二)は「新年」と題され、黄野(220行)詩稿用紙に書かれている。下書稿(三)は、下書稿(二)の裏面に書かれたもので、タイトルもそのまま。そして定稿用紙に定稿。生前発表なし。

先行研究は亀井茂「賢治と早池峰 岳川幻想溪谷とトラブル」(『早池峯6』・昭和五二年十月)、栗原敦「文語詩稿」とユーモア(『宮澤賢治 透明な軌道の上から』・平成四年八月・新宿書房)、中村稔「疾中」(『文語詩稿』その他)(『宮澤賢治ふたたび』・平成六年四月・思潮社)、澤田由紀子「宮澤賢治「文語詩稿」における「定稿性」についての考察」(『甲南大学紀要文学編』・平成十一年三月)、島田隆輔「宮澤賢治・文語詩稿五十篇ノ 詩系譜 の論へ(下)」(『翔けりゆく冬のフェノール』) 試注から(『論攷宮澤賢治2』・平成十一年三月)、赤田秀子「さき立つ名誉村長は」(『宮澤賢治 文語詩の森 第二集』・平成十二年九月・柏プラーノ)、信時哲郎「宮澤賢治「文語詩稿 五十篇」評釈四」(『神戸山手大学紀要4』・平成十四年十二月) などがある。

本作品に先行する口語詩として『新校本全集』では「職員室に、こつちが一足はいるやいなや」をあげるのみだが、既に指摘があるように、「四信五行に身をまもり」、「めづらしがって集まってくる」も先行する口語詩であると考えてよいだろう。関連する文語詩としては、「雪つづ

まきて日は温き」「氷柱かゞやく窓のべに」「さき立つ名譽村長
は」などがあげられる。ことに「氷柱かゞやく窓のべに」は、『文語詩
稿 五十篇』において、本作品の直前に収録されていることから、拙論
(前掲)では連作の可能性を指摘しておいた。

ここでは、最も関連が深いと思われる口語詩「職員室に、こつちが一
足はいるやいなや」をあげておくことにする。

職員室に、こつちが一足はいるやいなや

ぱつと眉をひそめたものは
黄の狩衣によそほへる

日高神社の別当だ

半分立つて迎へるものは

黒紋付に袴をはいた

二人の小さなお百姓

当然ここで

ぼくが何かを云ふべきであるが

何せあのまつ青な大高気圧の下で

引き汐のやうに奔つてゐる

乾いて光る吹雪のなかを

二里もやってきたので

耳だの頬だのぼうぼう熱り

咽喉はひきつって声が出ない

みんなだまつてお茶をのむ

わづかに濁り粕もはいつた日本の緑茶

校長さんもだまつてお茶をつぎまはる

日高神社の別当は

怒らなくてもいゝわけだ

あの早池峰の原林を

いくらじぶんが先達で

夜なかにやってきたからといって

だまつてみちに立つてゐる

こつちにいきなりつきあたって

叫びをあげて退いたのは

そつちの方が悪いのだ

アステイルべの花の穂が

あちこち月にひかつてゐたし

そんな間ではなかつたのだ

けれども向ふの怒るのは

こつちの覇気でもあるらしい

こどもらがこつそりかはるがはる来て

がらすの戸から口をあいたりのぞくのは

水族館のやうでもある

おとなもそろそろ来てゐるやうだ

日高神社の別当は

いまだに眉をはげしく刻む

賢治は夜中の早池峰の原野で、「十人ばかりの手下(口語詩 下書稿

(一)」を従えた「日高神社の別当」と出くわしたらしい。日高神社というの

は、水沢市日高小路にある弘仁元年(八一〇年)創建と言われる日高神

社のことだろう。十人も「手下」がいたことや、別当のプライドの高さか

ら言つて、そつ考えてよいように思う。

とすると、賢治は水沢近辺にある小学校(?)の新年の祝賀会に、吹雪

のなかを二里も歩いてやってきたということになりそうだ。賢治は大正自

由主義教育を取り入れた岩手県下の小学校教員と連絡を取り合っていたの

で(岩手県師範学校付属小学校の佐藤瑞彦や大迫小学校の菅原隆太郎ら、

そつしたネットワークを背景に来賓として招かれたのかもしれない。

さて、この時の経験が賢治の精神史上でいかに強く焼き付けられたかは

関連作品の多さが物語っているが、本作品における登場人物はそれぞれに

「茶をのみつ」として並列的に並べられた別当、二人のお百姓、校長の三

者(四人)と、それを覗き込んでゐる学童らであり、職員室における緊迫

した雰囲気を作つた張本人である。「ぼく」は表れていない。つまり、口語

詩の状況はそのまま文語詩に受け継がれながら、制作動機や背景について

は全く語られていないわけである。口語詩では、別当に対する思いといつ

たバックグラウンドを語ることばかりに急であつたように思えるが、文語詩

になると、賢治と思われる視点人物の影が薄くなつていくといふ賢治の文

語詩一般に指摘されている傾向が、きわめて明瞭に表れている。

五輪峠と名づけしは、
 (巖のむらと雪の松) 地輪水輪また火風、
 峠五つの故ならず。

ひかりうづまく黒の雲、
 苔蒸す塔のかなたにて、
 ほそぼそめぐる風のみち、
 大野青々みぞれしぬ。

語注

五輪峠 江刺市、遠野市、和賀郡東和町の境界となる標高五五六mの峠。
 葛西大崎一揆で父を失った子が、父の菩提を弔うために開削した道で、
 頂上に五輪塔を建てたことから、この名前がついたという(『角川日
 本地名大辞典』)。

地輪水輪また火風 仏教の世界観によると、万物は「地・水・火・風・
 空」の五大要素(五大)でできていることになっている。輪とはすべ
 ての徳を具備するということ。五輪塔とは、地・水・火・風・空を、
 それぞれ方・円・三角・半月・宝珠にかたどったもので、平安時代の
 半ばから死者への供養塔あるいは墓標として用いられた。花巻市の身
 照寺にある賢治の墓石も五輪塔を象ったもの。

大野 固有の地名ではなく、広大な野原のこと。小倉豊文(後掲)が書
 いているように、賢治はこの時、五輪峠を北東側(遠野側)から登っ
 ているので、ここでいう「大野」は北上平野のこと。下書稿の記述と
 も一致する。

大意

五輪峠という名前がついているのは、地輪、水輪、火輪、風輪……
 とそれぞれに名のついた五つの峠があるからではなく、(ただ岩と雪をか
 ぶった松の木があるばかり)五輪塔があるからなのだ。

黒い雲の切れ目からは光が漏れ、峠に向かつてほそぼそと風の道もで
 きている。苔むした五輪塔の彼方には、青々とした北上平野にみぞれが
 降っている。

評釈

口語詩「一六 五輪峠」を文語詩にしたもの。下書稿と定稿が現存し、
 下書稿は、口語詩「一六 五輪峠」下書稿(二)の裏面にある。生前発表なし。
 先行研究には小倉豊文「五輪峠」(『四次元1』・昭和二十四年九月)、青山
 和憲「文語詩稿に関する独善的妄言」(『宮沢賢治9』・平成元年十一月)、
 木村東吉「峠の空に見つめるものは」《春と修羅 第二集》五輪峠紀行詩
 群考」(『島大國文25』・平成九年二月)、栗原敦「五輪峠」(『宮沢賢治 文
 語詩の森 第二集』・平成十二年九月・柏ブライノ)などがある。口語詩
 に関する言及は、賢治の宇宙観が語られているためか数多い。

口語詩の最終形態(下書稿(二))をあげておきたい。

一六 五輪峠

一九二四、三、二四、

宇部何だつて?…… / 宇部興左工門?…… / ずみぶん古い名前だな
 何べんも何べんも降った雪を / いつ誰が踏み堅めたでもなしに / みち
 はほそぼそ林をめぐる
 地主つたつて / 君の部落のうちだけだらう / 野原の方ももつてるのか
 …… それは部落のうちだけです……
 …… 十町歩もあるさうです……

それで毎日糸織を着て / ありりのへりできせるを叩いて / 政治家きど
 りであるんだな / それは間もなく没落さ / いまだつてもうマイナスだ
 らう

向ふは岩と松との高み / その左にはがらんと暗いみぞれのそらがひら
 いてある

そこが二番の峠かな / まだ三つなどあるのかなあ

がらんと暗いみぞれのそらの右側に / 松が幾本生えてある / 藪が陰気
 にこもつてある / なかにしよんぼり立つものは / まさしく古い五輪の
 塔だ / 苔に蒸された花崗岩の古い五輪の塔だ

あゝこゝは／五輪の塔があるために／五輪峠といふんだな／ぼくはまた／峠がみんなまで五つつあつて／地輪峠水輪峠空輪峠といふのだらうと／たつたいままで思つてゐた／地図もたずに来たからな
そのまちがった五つの峯が／どこかの遠い雪ぞらに／さめざめ青くひかつてゐる／消えようとしてまたひかる

このわけ方はいゝんだな／物質全部を電子に帰し／電子を異相といへば／いまとすこしもかはらない

宇部五右衛門が目をつむる／宇部五右衛門の意識はない／宇部五右衛門の霊もない／けれどももしも真空の／こつちの側かどこかの側で／いままで宇部五右衛門が／これはおれだと思つてゐた／さういふやうな現象が／ぼかすと万一起るとする／そこにはやつぱり類似のやつが／これがおれだとおもつてゐる／それがたくさんあるとする／互ひにおれはおれだといふ／互ひにあれば雲だといふ／互ひにこれは土だといふ／さういふことはなくはない／そこには別の五輪の塔だ

あ何だあいつは

いま前に展く暗いものは／まさしく北上の平野である／薄墨いろの雲につらなり／酵母の雪に朧ろにされて／海と湛える藍と銀との平野である

向ふの雲まで野原のやうだ／あすこらへんが水沢か／君のところはどの辺だらう／そこらの丘のかけにあたつてゐるのかな／そこにさつき

の宇部五右衛門が／やはりきせるを叩いてゐる
雪がもつこにもどしどし降つてくる／塵のやうに灰のやうに降つてくる／つつじやこならの灌木も／まっくろな温石いしも／みんないっしょにまだらになる

一読して明らかなように、賢治と思われる話者と、教え子あるいは後輩と思われる人物の対話を中心に構成されている。この関係は「一七 丘陵地を過ぎる」でも踏襲されるが、同日の作品である「一四 湧水を呑まうとして」や、翌日の「一八 人首町」、「一九 晴天恣意」に、同伴者の影はない。また「五輪峠」の下書稿(一)はモノローグで展開されていたことから、「もともとは居なかつた若者がひとり、まるでイリュージョンのように出現して、詩人の語りかけをひき受けるにいたつた(天沢退二郎『宮沢賢治の世界』・昭和六三年一月・日本放送出版協会)」と解されている。

る。

ところで賢治は、この時まで五輪峠の命名の由来を「峠五つの故」だと思つていたので、初めてここを訪れたかのように読める。が、賢治と同じ年に盛岡高等農林に入學し、寮も同室だった高橋秀松は、賢治が「五輪峠では、蛇紋岩脈にハンマーを打ち入れ転び散る岩片を拾い乍ら、ホー、ホー二十万年もの間陽の目を見ずに居たので、みな驚いていると叫んでい(川原仁左門『宮沢賢治とその周辺』・同刊行会・昭和四七年五月)」と書いている。高橋はそれがいつのことであつたか特定していないが、大正六年八月末に賢治と一緒に江刺郡の土性調査に行ったのできことだと考えていいと思う。書簡や歌稿から、彼らは正法寺・阿原山・種山ヶ原というように、江刺郡の郡界の山間部を調査していたことがわかるが、このペースでいけば、江刺、和賀、上閉伊の三郡が接する五輪峠に向かつたと考えるのが自然だからだ。さらに付け加えれば、五輪峠の近辺には蛇紋岩の岩帯が通つており(蛇紋岩は温石石とも呼ばれ、下書稿には「温石石と雪の松」という句もあつた。火で暖めたあと、布に包んで懐炉として使われたことからこの名が付いた)、地質学的にも特筆すべき場所であつたから、彼らにとつて、ここは特別の場所だったのである。なぜ五輪峠の蛇紋岩脈にハンマーを打ち入れた賢治があれほど喜んだのか、そして、なぜそれを高橋も忘れずにいたのかは、こうした背景があつたからだと考えられる。

ただ、そうなると、賢治は既に五輪峠に登つていながら、五輪塔の存在に気づかないでいたということになる。今日、ここを訪れば、誰でも五輪塔の存在には気がつくはずだが、三人のうちの誰もこれに気づいていなかったようなのは極めて不自然ではないだろうか。

しかし、この謎も、大正六年の夏は「江刺郡」の土性調査で訪れたのだということさえ思い出せば簡単に解ける。というのも、賢治たち一行は、江刺郡側の南西斜面から五輪峠に登り、帰り道もまた同じ側に降りているからである。普通は、峠の向こうに用事があるからこそ、わざわざ峠を越えるわけだが、土性調査が目的であれば、北東の上閉伊郡側に立入る必要は全くない。そうなれば、北東斜面に少し下つたところに位置する五輪塔の存在に気づかなかつたとしても、なんら不自然ではないのである。つまり、大正十三年三月は、北東側から五輪峠に登つた「初めての経験」だつ

たわけである(当時と現在とでは道の位置も違っているというが、少なくとも口語詩を読む限り、あまり大きな違いはないように思う)。

こうした考察は瑣末主義トリウエアリズムに思われるかもしれない。しかし、五輪峠に登ったのが、この時が初めてではなかったからこそ、賢治の心に強く焼きついたのだと考えることもできるのではないだろうか。

かつて自分が登ったことのある五輪峠…… 知っているつもりでいたのに、自分が思い描いていたような峠などはなく、「向ふは松と岩との高み / その左にはがらんと暗いみぞれのそらがひらいて」あり、北上平野が見渡せた。頭の中ではわかつていても、今までイメージしていた五つの峠が頭の中からなかなか抜けない。賢治はこんな心象のドラマを口語詩に書き付けたのではないだろうか。

賢治は、この「発見」から、東洋的宇宙観と現代科学の一致に関する想いや、農村社会の抱える問題まで思い浮べる。しかし文語詩では、結局この「発見」に焦点が絞られることとなる。つまり、賢治が一生をかけて取り組んだ宗教、化学、農村のいずれのテーマもが排され、普通の人としての視線で作品が綴られ直すわけである。そこまで思い切った凝縮に踏み切れたのも、この「発見」のインパクトがいかに強かったかを物語っている。翌日の日付がある、「一八 人首町」、「一九 晴天恣意」にも引き続いて五輪峠が登場しているが、それも五輪塔の示す宇宙観に思いを馳せていたからであると言つより、この時の印象がいかに強かったかを示しているのではないだろうか。

二三 流氷ザエ

はんのきの高き梢せうより、
汽車はいまやゝにたゆたひ、

見はるかす段丘の雪フツライト、
天青石まぎらふ水は、

きらゝかに氷華をおとし、
北上のあしたをわたる。
なめらかに川はうねりて、
百千の流氷ザエを載せたり。

あゝきみがまなざしの涯、
もろともにあらんと云ひし、
うら青く天盤は澄み、
そのまちのけぶりは遠き。

南はも大野のはてに、
日は白くみなそこに燃え、
ひとひらの吹雪わたりつ、
うららかに氷はすべる。

語注

流氷 一般には寒冷地帯の海水が割れて、風や海流で運ばれるもののことを言うが、ここでは川を流れる氷塊のこと。平澤信一(後掲)によると、「岩手県上閉伊郡等では河中を流れる氷塊を、ザエ(ザイ)と呼んでいたという」。

はんのき 日本各地に分布するカバノキ科の落葉高木で、幹は直立し、高さは二十mにも達する。湿地を好み、田のあぜなどにもよく植えられる。古代ケルト人は妖精の木と呼び、切り倒すことを厳禁していたという。

氷華 氷が結晶して花のようになったもの。

段丘 河川や海、湖などに沿って分布する階段上の地形のこと。

天青石 天青石とは石灰岩、砂岩などの堆積岩の中や熱水鉱脈の中に産するストロンチウム硫酸塩鉱物で、淡い空色をしていることからこう呼ばれる。ただしルビのアズライトは、藍銅鉱のことで、これは銅の水酸化炭酸塩鉱物で色は濃い青。天青石は本作品にしか登場していないし、色も淡すぎるので、賢治作品に数回登場しており、色も濃い藍銅鉱(アズライト)を指しているのだとすべきだろう。「新修全集月報」の小沢俊郎による語注に「藍銅鉱(azurite、旧訳名は銅青石)、天青石(celestite)、天藍石(azurite)、青金石(lazurite)等の混同。」とあるが、これらはすべて別の鉱物で、極めてややこしい。「石つこ賢さん」とあだ名されていた賢治でも、間違えてしまうのは仕方がない。

天盤 空のこと。

大意

はんのきの高い梢から、きらきらと氷結した雪のかげらを落としながら、若手軽便鉄道の汽車は、しばし揺れつつ朝の北上川を渡っている。視界が開けると、北上川の河岸段丘は一面の雪。川はなめらかにうねり、藍銅鉱のような深い藍色を交えた川の水は、百千の流水を載せて流れている。

ああ、きみのまなざす彼方に、空は真つ青に澄み渡り、「一緒にいよう」と誓い合ったあの煙たなびく街から、今は遠く離れてしまった。

南方の北上平野の果てにまで吹雪は吹き込み、太陽は北上川の水底に白く映り、流水は晴れやかに流れていく。

評釈

下書稿と定稿が現存。下書稿は、黄野(220行)詩稿用紙を使って、「ロマンツェロ」とタイトルをつけられている。生前発表なし。

先行研究には、佐藤栄二「文語詩を誦む(一)」(『賢治研究』・昭和五十年十一月)、小寺政太郎「文語詩選九編」(『賢治研究50』・平成元年九月)、岡井隆「文語詩稿」の意味(『文語詩人 宮沢賢治』・平成二年四月・筑摩書房)、大岡信「疾中」詩篇と「文語詩稿」と(『校本全集月報』・昭和四九年六月)、山内修「非在の個へ」(『宮沢賢治研究ノート 受苦と祈り』・平成三年九月・河出書房新社)、木村東吉「文語詩稿 五十篇」(『流水』の背景 《春と修羅 第二集》との関係にふれて)、『論宮沢賢治3』・平成十二年八月)、近藤晴彦「死の視点」(『宮沢賢治への接近』・平成十三年十月・河出書房新社)、平澤信一「流水」(『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』・平成十四年七月・柏プラーノ)などがある。内容的にも起承転結がしっかり整っており、大岡信(前掲)に「非のうちどころのない抒情詩」と言わせているくらいに評価の高い作品。

舞台は若手軽便鉄道で、第一聯で「北上のあしたをわた」ってから、「流水」や南に開けた「大野のはて」を見ているので、汽車は遠野方面から花巻に向かっているようである(これを「西行」と称した)。当時は、現在のJR釜石線の路線と違って、ずっと北上川よりを走っていたので、北上川も今よりよく見えたのだろう。

第三聯になると突然「きみ」が現れ、「もろともにあらん」と「遠き」「まち」で誓い合った過去が語られる。しかし、第四聯では、再び風景描写に戻り、「きみ」とは、「もろとも」は居つづけられなかったら「た」が暗示されて終わっている。

本作品の関連作品として『新校本全集』には「歌稿(B)」中の短歌三首があがっている。

710 711 あはれきみがまなざしのはて

むくつけき

松の林と土耳古玉の天と

710 711

北上の大野に汽車は入りたれば
きみはうるはしき面をあげざり

710 711

うるはしく
うらめるきみがまなざしの

はてにたゞずむ緑青の森

さらに、同じ筆記具で、同じ時に書いたと思われる

710 711 むくつけきその緑青の林より

まなこをあげてきみは去りけり

も関連作品だと言っている。

ちなみにこれらの短歌は、生原稿を見ると、「歌稿(B)」の余白を生かして、文語詩「こらはみな手を引き交へて」の下書稿(一)を書き付けてある右に二首、左に二首書かれているので、制作年代は「歌稿(B)」に収録されているものよりもずっと後の文語詩時代に書かれていることが明白で、「歌稿(B)」中の短歌としてよりも、同じ用紙にたまたま書き付けられた文語詩の習作的なものだと考えた方がよいように思う。

さて、佐藤栄二(前掲)は、『春と修羅 第二集』の「若手軽便鉄道の一月」も、本作品の関連作品としてあげている。

若手軽便鉄道の一月

ぴかぴかぴかぴか田圃の雪がひかってくる
河岸の樹がみなまっ白に凍っている

一九二六、一、一七

うしろは河がうららかな火や氷を載せて
ぼんやり南へすべつてゐる

よう くるみの木 ジュグランダ― 鏡を吊し

よう かはやなぎ サリックスランダ― 鏡を吊し

はんのき アルヌスランダ― 鏡を吊し

からまつ ラリクスランダ― 鏡をつるし

グランド電柱 フサランダ― 鏡をつるし

さはぐるみ ジュグランダ― 鏡を吊し

桑の木 モルスランダ― 鏡を……

ははは 汽車がたうたうなぐめに列をよこぎったので

桑の氷華はぶさぶさ風にひかつて落ちる

ここには恋愛を思わせるものこそ見出せないが、同じ場所での作品であり、下書稿には「流氷」の語も登場している。佐藤の言うとおり、関連作品としていいと思う。文語詩では多くの木のうち「はんのき」だけが採用されているが、これは一番キヲキラしていた「はんのき」(「鏡」などという字まで作っている)の印象が文語詩制作の時期まで持続した結果なのかもしれない。

木村東吉(前掲)はこれを受けて、「若手軽便鉄道の一月」の下書稿

(一)のタイトルが「銀河鉄道の一月」とつけられていたこと、また、ジョバンニがカムパネルラに「どこまでも一緒に行く」と言っていたことと、本作品に「もろともにあらん」とあることとの関連などから、本作品と「銀河鉄道の夜」も密接な関係にあるのではないかと立つ。

(一)の他にも『文語詩稿 五十篇』の「月の鉛の雲さびに」の下書稿(一)「冬のスケッチ」に次のようにあるのも、関連作品だとは言えないだろうか。

線路

汽車のあかるき窓見れば

こゝろつめたたくうらめしく

そらよりみぞれ降り来る。

まことのさちきみにあれと

このゆゑになやむ。

きみがまことのたましひを
まことにとはにあたへよと
いな、さにあらず、わがまこと
まことにとはにきみよとれ、と。

ひたすらにおもひたむれど
このこひしさをいかにせん
あるべきことにあらざれば
よるのみぞれを行きて泣く。

まことにひとにさちあれよ
われはいかにもなりぬべし。
こはまことわがことばにして
またひとびとのことばなり。

かなしさになみだながるる。

みぞれのなかの菩薩たち
応はひゞきのごとくなり
はかなき恋をさながらに
まことのみにちたちもどる。

時間帯その他のタイトルまでは一致しないものの、これらの諸篇には汽車、恋愛、雪、川(銀河も含めて)などのイメージが共通している。「月の鉛の雲さびに」と「共通の詩想が用いられている」(山内修「文語詩について 賢治の エロス の行方」国文学 解釈と鑑賞・平成十二年二月・至文堂)と指摘される二つの文語詩、すなわち『文語詩稿 一百篇』の「公子」(「あるときは遠き夜の火にノた」ともに行かんとねがひ(下書稿(一))「といった句が含まれる」や、『文語詩未定稿』の「夕日は青めりかの山裾に」(「かの町はるかの地平に消えてノおもかげほがらにわらひは遠しノふたりぞたゞのみさちありなんとノおもへば世界はあまりに暗くノかのひとまことにさちありなんとノまさしくねがへば」こゝろは

あかし」といった句が含まれている)も関連作品とすべきだろう。

他にも、北上川のイギリス海岸あたりを舞台にしている「川しろじるとまじはりて」(『文語詩稿 五十篇』)の下書稿(一)には、「あてなく投ぐるわが眼路に、ノきみ待つことのノむなしきを知りてノなほわが瞳のうち惑ふ」という部分があるし、孔雀印手帳の「ロマンツェロ」と題された断片にも、「車窓のあなたノ北のはてノきみきたりノ訪ふにもノ似たり」とある。また、「ロマンツェロ」あるいは「Romanzer o」と(仮)題された作品が文語詩稿に数編あることも考慮に入れると、関連作品の数はさらに増えることになりそうだと。

ちなみに、「公子」の下書稿(一)の第一形態に

父母のゆるさぬもゆゑノきみわれと 年も同じくノともに尚 はた
ちにみたすノわれはなほ なすこと多くノきみが辺は 八雲のかな
た

わが父は わが病ごとノ二たびの いたつきを得ぬノ火のごとくき
みをおもへどノわが父にそむきかねたり

とあることから、これらの作品の背景には、賢治が中学卒業後の浪人時代に岩手病院の看護婦に恋したことが原体験としてあったことが想像できる。従って、「流水」における「きみ」のモデルも同一人物だったということになりそうだと。

賢治のこの恋は、父母の反対によって潰えたことになっているが、「文語詩稿」ノート」の大正三年のところに「退院 いざや起てまことの恋に」という語句が見られるように、法華経と出会う以前であるにもかかわらず、賢治は「きみ」との別れを、「正しいねがひに燃えてノじぶん」とと万象といっしょにノ至上福しにいたらうとするノそれをある宗教情操とするならばノそのねがひから砕けまたは疲れノじぶんとそれからたつたもひとつのたましひとノ完全そして永久にどこまでもいっしょに行かうとするノこの変態を恋愛といふ(小岩井農場)」といった宗教的な信念が理由だったとする方向に、自らの体験を意味付けていたようである。

こうして考えてみると、恋愛と宗教に関わるすべての作品が本作品の関連作品だということにもなりかねないが、今は、これ以上のことを言う準備ができていない。ただ、実験としての賢治の初恋が、妹トシへの想いと同じくらいに、広く、深く、そして、たくさんの作品に影響を与えてい

るのではないかと指摘してよいと思われる。

もっとも、賢治の初恋の描写にどのくらい虚構が交じっているのか、また、他の人への思いが交じっていないかどうか、他人の恋愛譚を取り入れていないかどうか……については判断ができない。さらに、賢治がかくまで初恋にこだわったのは、それほど深く「きみ」を愛していたからなのか、あるいは、作品の構成から恋愛のテーマが要請された時、やむなく自分の乏しい(?)経験を下敷きにしただけなのかどうか、今は不明であるとしが言えない。

二四 「夜をま青き蘭むしろに」

夜をま青き蘭むしろに、 ひとびとの影さゆらげば、
遠き山ばた谷のはた、 たばこのうねの想ひあり。

夏のうたげにはべる身の、 声をちぢれの髪をはず、
南かたぶく天の川、 ひとりたよりとすかし見る。

語注

ま青き蘭むしろ 「ま青き」は、おそらく「まさおき」と読ませるつもりであったのだろう。蘭はイグサのこと。イグサは日本全国の湿地に自然分布し、その茎を畳表や花むしろの材料とした。

たばこのうねの想ひ 舞台となった稗貫郡大迫町の近辺ではタバコ栽培が盛んで、大正七年九月に土性調査を行った際、賢治は「たばこばた風ふけばくらしたばこばた光の針がそゞげばかなし」(『歌稿「A」六六九』)という短歌を作っている。その「うねの想ひ」というのは少々難解だが、島田隆輔(後掲)が指摘するように「宴席で酔って揺らぐ人たちの姿が、地面からは1m前後の高さにもなっている葉煙草の群れの、ゆらめく有様に重なって想像される」ということだろう。うたげにはべる身 賢治の師匠である盛岡高等農林学校の関豊太郎教授の土性調査に対する謝恩/送別の集いに呼ばれた芸者のこと。後聯で

は彼女が視点人物となっている。

声をちぢれの髪をほぢ 下書稿(三)に「ちぢれの髪恥ぢ 声をほぢ」とあることから、宴席に呼ばれた芸者は、自分の声とちぢれ髪とを恥じていたようだ。

ひとりたより 島田隆輔(後掲)は、「頼りとするのは自分ぎりだ」としているが、「天の川だけが頼りだ」と解したい。

大意

夏の夜、真新しく青々とした畳に、宴会に集まって揺れ動く人々の影が映るのを見ていると、遠い山の辺や谷の辺のタバコ畑で、タバコが風に揺られて動くのを見ているような気がする。

真夏の宴席で、縮れた髪とかすれた声を恥じながら伺候する自分は、窓外の南の空にある天の川だけが頼りだと思つて、すかし見るばかりである。

評釈

現存稿は五。無野詩稿用紙の表裏に記された下書稿(一)。下書稿(二)の裏面余白に下書稿(二)。孔雀印手帳の九〇ページに書かれた下書稿(三)。下書稿(一)・(二)と同じ紙面に下書稿(四)。そして定稿。下書稿(一)にのみ「土性調査慰勞宴」のタイトル。生前発表なし。

先行研究には中村稔「土性調査慰勞宴(鑑賞)」(『日本の詩歌 宮沢賢治』昭和四九年十月・中央公論社)、宮城一男「土性調査の日々」(『宮沢賢治の生涯石と土への夢』昭和五五年十一月・筑摩書房)、天沢退二郎「『声』の出所をめぐって」(『宮沢賢治』鑑・昭和六一年九月・筑摩書房)、栗原敦「文語詩稿」試論(『宮沢賢治 透明な軌道の上から』平成四年八月・新宿書房)、中村稔「疾中」「文語詩篇」その他(『宮沢賢治ふたたび』平成六年四月・思潮社)、小野義春「賢治と大迫」1-21(『JAおおはさま町はーとふる50』71(ただし58は休載))・平成八年五月〜平成十年二月)、伊藤卓美「雪の宿」(『宮沢賢治 文語詩の森』平成十一年六月・柏プラーノ)、佐藤通雅「二冊の手帳」(『宮沢賢治東北砕石

工場技師論』平成十二年二月・洋々社)、細田嘉吉「文語詩(夜をま青き蘭むしろに)」と「雪の宿」(『賢治研究83』平成十二年十二月)、島田隆輔A「一九二三(大正十二)年二月の宮沢賢治」(『国語教育論叢10』平成十二年六月)、同B・C・D「宮沢賢治『文語詩稿』/歌ひめの詩系譜へ(その序)(上)(下)」(『島大国文28』平成十二年三月)、島大国文29「平成十三年三月」X「島根県立松江北高等学校研究紀要39」平成十四年三月)などがある。

また、稗貫郡土性調査に関しては亀井茂の「宮沢賢治の」稗貫郡地質及び土性調査”参加の意義”(『宮沢賢治研究Annals』平成四年二月)を始めとする論考や井上克弘の『石つこ賢さんと盛岡高等農林』(平成四年五月・地方公論社)などに詳しい記述がある。

賢治は盛岡高等農林卒業直後の大正七年四月から稗貫郡土性調査に携わり、稗貫郡内をくまなく歩き回った。これは賢治が師事した盛岡高農の関豊太郎教授が、稗貫郡長の依頼によって取組んだプロジェクトで、大正十一年には『若手県稗貫郡地質及土壌調査報告書』として完結し、稗貫郡の農業に大きく貢献したと言われている。

しかし賢治は、「土性調査のみにては研究とは名のみにて単に分析及調査に過ぎ申さず候(宮沢政次郎宛書簡・大正七年二月一日)」と思つていた。また大正七年四月十八日には、友人・佐々木又治(大正六年の江刺郡土性調査で、賢治と行動をともしたうちの一人)に宛てて、「コチラデハマダ雪力消エマセン。寒サウナ話ヲスルナラバ(私八毎)日撰氏〇度ノ溪水ニ腰迄浸ツテトルノデス」と書き送っており、こうした無理がたたつてか、賢治はこの夏、肋膜炎を患うこととなった。しかし、亀井茂(前掲)も説くとおり、こうした経験が賢治の関心を岩手の山野や農村に近づけるきっかけとなり、多くの作品を生んだだけでなく、賢治の生涯の指針を決定する役目を果たしたことは疑えないように思う。

本作品は下書稿(一)に「土性調査慰勞宴」とあったことからわかるように、土性調査の慰勞宴が催された時の経験に基づいている。賢治は大正九年八月二十六日に大迫町の石川旅館に共に泊まり、友人・保阪嘉内に宛てて、「この間は関さんに随いて大迫の附近煙草の畑の中を歩いて来ました(大正九年九月四日)」と書き送っている。慰勞宴はこの時に開かれたのだらう。

『調査報告書』が完成するのは大正十一年なので、この段階で慰労宴を開くのは早すぎる気もするが、関は大正九年七月二十六日付で盛岡高農を退職して、東京・西ヶ原の農事試験場囑託となっているので、これは岩手を離れる関に対する慰労宴（送別会）だったと考えるべきなのだろう。

関の退職の背景には、高農校長の佐藤義長との確執があったようで、農事試験場で関の助手を務めた白石彊一も、直接先生に伺ったことはありませんが、そのような話が伝わっております。関先生は大変感情の烈しいお方ですので、多分そんなことが原因だと思います」と語っている（井上克弘・前掲）。ただでさえ酒癖の悪い関のことであるから、この時の醜態はすさまじかったのだらうと細田嘉吉は推測しているが（前掲）、たぶんそのとおりなのであろう。拙論「宮澤賢治」文語詩稿 五十篇「評釈 四」で、『文語詩稿 五十篇』中の「退職技手」を、盛岡高農の小泉多三郎が退職した際の「すさまじき」「わかれつたげ」の様子を描いたものではないかと書いたが、細田の説を受け入れるとすると、「退職技手」にあたるのは関であり、その「わかれつたげ」と本作品における「土性調査慰労宴」が同じ「宴」である可能性もありそうだ。

さて、そんな宴席で、酒を飲まない賢治がいったいどのような気持ちでいたのかは、次にあげる下書稿（一）（第一形態）を読めばおおよそ想像がつく。

土性調査慰労宴

酔ひて博士のむづかしく

慶応出でし町長も

たゞさりげなくあしらへば

縮れし髪を油もて

うち堅めたるをみな子も

なすべきさが知らぬらし

面をひそめて案ずるは

接待役の郡の枝手

ことあたらしくうちしける

青き蘭草の氈の上に

人人のかけさゆらげば
昨日も今日もめぐり来し
たばこばたけのおもひあり

また人人の様ごとに

黄なる衣につままれて

三尾添へたる小魚は

昨日も今日もたどり来し

くるみ覆へるかの川の中

に生れたる小魚なれ

村長われが前に居て

わが酒吞まず得酔はねば

西瓜を喰めとすむるは

組合村の長なれや

あゝこのま夏山峡の

白き銀河の下にして

天井低きこの家に

つどへる人ぞあはれなれ

賢治は、気の進まない慰労宴に借り出されて恩師の醜態を目の当たりにさせられた上、飲みたくもない酒、食べたくもない西瓜を勧められ、「天の川だけが頼りだ」と思ったようだ。そんな中で、ただ一人、賢治と「やるせなさ」を共有できそうな人がいた。「縮れし髪を油もて／うち堅めたるをみな子」である（末尾に「天井低きこの家に／つどへる人ぞあはれなれ」とあるのは、粗末な家に集まっているから「あはれ」であるようにも思えるが、島田隆輔C（前掲）によれば、大迫では類焼・延焼を防ぐために家屋の軒を低く抑えて建てるのが通例だったらしい）。

大迫はかつて盛岡・遠野・釜石をつなぐ交通の要衝であり、また九の日に行われる三斎市や早池峰山への参拝客でも賑わったという。となると、ここを訪れる人々を接待するための芸者も集まることになる。島田隆輔B・C・D（前掲）が着目しているように、賢治は文語詩に彼女ら「歌ひ

め」を多く登場させているが、本作品に限っては、薄幸の女性たちを憐れむといった感じは薄い。むしろ真の視点人物であるところの賢治が、改稿の際にその「私」性をどんどん殺ぎ落としていく過程で、「やるせなさ」を代弁させられているといった印象もある。下書稿(一)では、自分が仰いでいたはずの銀河を、定稿では「をみな子」に仰がせているあたりにも、それを窺うことができるのではないだろうか。

二五 「あかつき眠るみどり」(こを)

あかつき眠るみどり(こを)、
しとみ上ぐれば川音や、
霧はさやかに流れたり。

よべの電燈(あかり)をそのまゝに、
アムステンジュンいろ紅き、
霧はさやかに流れたり。

語注

あかつき 夜が明ける寸前のまだ暗い頃。

みどり(こ) 生れたばかりの児のこと。

しとみ 格子組の裏に板を張ったもので、日光をさえぎり、風雨を防ぐために用いた。ここでは窓のことを古語風に言ったのだと考えられる。

アムステンジュン 北米ミズーリー州でL・C・アムステンが選出したもので、「果実は小さいし中果、円形ないし偏円形、果頂微凹、縫合線

広くて浅く、果皮緑白色で紅紫色の暈を生じ、外観美麗であるが片肉果が多い。剥離困難。果肉帯緑白色、柔軟多汁、やや繊維多、早生種として多甘の方である。品質中位」。また「わが国でも一時営利的栽培を見たが、現在ではほとんど採用されない」とのこと(『もも栽培精説』木村光雄・昭和三四年七月・富民社)。「炭疽病に犯され易い

から、営利的栽培には適しない(『通俗園芸講話 梨・桜桃・桃・李・杏』恩田鉄弥・昭和三年五月・博文館)ともいう。

尚、「最後の一片」等で有名なアメリカ力の短編小説家、オー・ヘンリ

I (一八六二—一九一〇)の「採られた果実の小さな傷(Little's peck in Garnered Fruit)」(『街の声(The Voice of the City)』所収)にも、アムステンジュンは登場する。新妻の「桃が食べたい」という言葉に応えようと、賭博場にまで乗り込んで、夫はようやく季節はずれの桃を手に入れるが、家に戻って妻に桃を手渡すと、オレンジの言い間違いであったことが判明する。オー・ヘンリーは早くから日本でも読まれていたので、賢治が「アムステンジュン」を品種名のまま使っているのは、小説中のついつい新しい新妻のことが頭のどこかを掠めたからかもしれない。

大意

夜明け前のひと時、添い寝している我が子の元をそつと離れて、小さな店の窓を上げると、川音が耳に飛び込み、さわやかに霧が流れているのも目に入ってくる。

昨夜から点いたままの電燈の下では、売れ残ったアムステンジュン種の桃の実の赤さが、うつつすらと輝き、いつそ熟してきたように見える。

評釈

現存稿は三種。「歌稿(B)」の第九十五葉の下部に下書稿(一)。黄野(220行)詩稿用紙に下書稿(二)。そして定稿。下書稿(二)には「朝」というタイトルが付けられていた。生前発表なし。

先行研究には栗原敦「あかつき眠るみどり(こを)」宮沢賢治の一類明珠(『宮沢賢治 透明な軌道の上から』平成四年八月・新宿書房)がある。

改稿過程を見てみると、「文語詩篇」ノートには、「六月 霧ノ中ニテ夜ヲ越エシ/ansden June」とあり、下書稿(一)には、「よべのあかりに照らされてノ売れのこりたる桃の実のノアムステンジュン色あかくノ霧のなかなる灯に熟る」とある。つまり、賢治は或る霧の朝、小商店の外から中の様子を見て書いたことがわかり、前聯における「みどり」に添い寝をしていた若い母親が部を上げるといった記述は、虚構である可能性が高い。それではなぜこのような前聯を書いたのだろう。

賢治が影響を受けた、とまで断言するつもりはないが、本作品の情緒は『徒然草』の「第三十二段」に似ているように思う。

九月廿日の比、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありく事侍りしに、おぼしいづる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬにほひしめやかにうちかをりて、しのびたるけはひ、いとものあはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事さまの優におぼえて、物のかくれよりしばし見ぬたるに、妻戸を今すこしおしあけて、月見のけしきなり。やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。跡まで見る人ありとはいかで知ららん。かやうの事は、ただ朝夕の心づかひによるべし。その人ほどなく失せにけりと聞き侍りし。

【訳】

九月二十日の頃、ある方にお誘いいただき、夜が明けるまで月を見て歩いたことがありましたが、その方は思い出される場所があつて、取次ぎをさせてお入りになった。荒れた庭には露がおびただしかつたが、香が自然に漂つており、ひっそりと住んでいる様子には、実におもむき深いものがあつた。

共に月見をした人は、ほどよい頃合いに出て来られたが、その場を立ち去りたい思いが残つて、ものかげからしばらく眺めていると、女性は戸を少し開けて、月を眺めているようであつた。すぐに家の中にもつてしまつたとしたら、残念であつただろう。訪問を終えた人がいつまでもその場にとどまっているなど、どうしてわかるだろうか。こつしたことは、日常の心遣いによるものだろう。その女性は間もなく亡くなられたと聞いています。

本作品で多用される「文語」は、漢語よりも「あかつき」、「みどり」、「

しとみ」、「さやか」……といった和語が目立つ。これも、『徒然草』と限定はしないまでも、古典文学の優雅なる情緒を借りようという意図の表れではないだろうか。

また、友人の藤原嘉藤治に、賢治が理想の女性について語つた言葉も、本作品と通底しているように思える。

そうだな。新鮮な野の食卓にだな、露のようにおりてきて、あいさつをとりかわし、一碗の給仕をしてくれ、すつと消え去り、また翌朝やつてくるといったような女性なら僕は、結婚してもいいな。

（森荘巳池「三原三部」の人・『宮沢賢治の肖像』・昭和四九年十月・津軽書房）

賢治はどこか植物的で物静かな女性が好きだつたようだが、アムステルダム・ユンの赤さと甘い香りが漂つてきそうな「あかつき」のシーンにも、やはり物静かで、朝露のようにはかなげな女性を配した。藤原の問に対して理想とする女性のイメージを語つたのと同じように、賢治はここでも自分の理想とする女性のイメージを具体化させたのではないだろうか。